



巻頭言

化学のこれからを見つめて

●
西山 繁 Shigeru NISHIYAMA

一般財団法人慶応工学会 常任理事, 慶應義塾大学 名誉教授, 化工誌編集委員会 委員長



本来ならば、様々な分野の適切な方々に執筆をお願い申し上げる立場ではあるが、このたび図らずも本号の巻頭言を担当させていただくことになった。

「化学と工業」誌は1948年の創刊以来継続する日本化学会の会誌であり、本会会員へ有益な情報を供給し、これをもって化学の発展と進化の一助となることを目指している。

本誌の読者である本会会員は2万数千人に及び、個人正会員をはじめ様々なカテゴリーの会員が存在し、その年齢層は中学・高校生からすでに第一線を退かれた大先輩まで非常に幅広いスペクトルを示している。したがって、これらすべての会員の興味を引く記事を毎号提供することは至難の業といえる。一方、現在の多くの社団・財団法人組織における頭の痛い問題として会員数の減少があり、その背景には多くの要因が考えられるものの、これに歯止めをかけるための決め手となる手段の模索が多大な労力を費やして行われている。結果的には、会員の退会を留まらせる手段として、会員であることのインセンティブをいかに創出するかが重要な鍵となる。

関連する課題の1つとして、会誌編集・発行について紙媒体から電子媒体への変更が各所で行われており、紙代、印刷代、輸送費などの削減および簡便な記事保管・検索の提供など昨今の傾向にマッチした利点が唱えられている。ただし、本誌はすでに会員マイページから電子版の閲覧が可能となっているが、広告収入など多くの要因が絡み、紙媒体からの完全な脱却は困難であることが正直なところである。

ここで話題を本誌の記事に戻してみると、前述のように非常に幅広いスペクトルの会員を読者として、年会、シンポジウムなどの情報を提供する会告とともに、論説、新型コロナウイルスなどに関するタイムリーな話題性に富んだ研究の解説、本会のディビジョン、若手研究者あるいは新領域研究グループによる研究紹介、本会が発行するジャーナルの論文情報、地方名産品の化学、化学史などを分野が異なる読者にも理解しやすいように、専門用語の解説を含めた平易な文章で記述しており、特別な話題提供についても柔軟に対応し、少しでも読み応えのある記事内容を目指している。

本誌2022年11月号の巻頭言に、姉妹誌である「化学と教育」誌の久保貴哉編集委員長(当時)が、同誌の方針・取り組みなどについて述べられている¹⁾が逐一合点のいく興味深い内容であった。今後、本誌はより広範囲な化学分野を対象として、その内容を広く読者に紹介し、各分野に対する理解のための道標となるような内容を目指していきたいと考えている。そのための一私案ではあるが、化教誌編集委員会との共同の場を持ち、議論の場から新たなインパクトを受け、両誌のさらなる発展を目指して一層努力していく所存である。

1) 久保貴哉, 化学と工業 2022, 75, 783.